

1. 基調講演「シンガポールにおけるオリンピック教育」(Sock Miang TEO KOH 博士、シンガポール国立南洋理工大学准教授)

オリンピック教育は、オリンピックが開催される時に強調され、他の時期には忘れられてしまいがちである。また、世論的には、オリンピック開催中は、金メダルの数など勝利追求の傾向が高まり、オリンピック教育の本質はなかなか着目されない。それに比べ、ユースオリンピックゲームズ(YOG)では、半分がスポーツ、残り半分は教育に焦点が当てられていて、オリンピック教育が強調されていた。

シンガポールにおける「オリンピック教育」は、たしかにYOGを契機に注目が集まったが、YOGが開催される前から実施されていた。中心になって取り組んだのは、シンガポールオリンピックアカデミー

(SOA)で、たとえば、①年に一度のオリンピックセッション、②若者を対象とした3日間のオリンピック・アカデミーセッション、③教育機関におけるオリンピアンとの交流などを実施した。

このように、YOGが開催される前からさまざまなプログラムが実施されてきたが、YOGがシンガポールにおけるオリンピック教育に与えた点もまた大きかった。YOGによって、オリンピック教育はより強調され、とくに、教育のみならず、メディアでも取り上げられるようになったこと、また、政府(教育省)の理解も深まり、オリンピック教育活動の支持を取り付けることがで

きた。

将来のあるべきオリンピック教育は、社会のニーズや国家のニーズと関連性がなければならない。シンガポールは日本と異なり、多民族国家であることから、民族の融合が国としての課題の一つという社会的背景がある。このような社会的、文化的背景により、求められ、期待されるオリンピック教育は多様であり、画一的ではない。これは、定形化された一つの方法があるわけではなく、各々の地域・社会によって求められるオリンピック教育があるはずだということである。

また、オリンピック教育やオリンピックムーブメントは、過去のものではなく、将来のためになければならない。これは、過去の歴史を振り返ることだけではなく、未来を担う若者の育成を重要視しなければならないという警鐘でもある。すなわち、現代社会、あるいは未来を見据えてオリンピック教育を実践していく必要があり、また、実践していくためには、そのためのツールを形成する必要がある。教師についてはそれを教える「教授法」が必要であり、その確立が急務である。

最後に、多方面の積極的な参画をはかることで、充実したオリンピック教育が展開されることを期待したい。

2. シンポジウム：アジアにおけるオリンピック教育の展開

シンポジウムでは、「アジアにおけるオリ

ンピック教育の展開」と題して、タイ、台湾、韓国、日本から4名の方が登壇し、それぞれの国や教育機関におけるオリンピック教育の現状や課題について報告した。

2-1. 「タイオリンピックアカデミーの学校でのオリンピック教育について」

(Wimonmas PRACHAKUL 博士、カセサート大学講師)

タイオリンピックアカデミー(TOA)は、2002年に設立され、オリンピックの理念のもと、教育コースを創設、大学にも導入し、大学生や大学院生にオリンピック教育を教授してきた。そこでは、オリンピズムやオリンピックムーブメント、ソリダリティなどについて、様々なことが学べるようになっている。

教育対象は学生だけではなく、体育教師にも行われており、オリンピック教育キャンプなどを実施している。たとえば、古代オリンピックの再現を通して、オリンピックの価値や理念を学んだりする機会を設けている。キャンプでは、グループに分かれ、さまざまな実践がなされる。歌を歌い、その歌詞の意味を通じてオリンピズムやオリンピックの価値を学ぶなど、抽象的な理念を学びやすいよう工夫が施されている。

このような具体的実践を通して、オリンピックに対する理解が深まるとともに、学生や教師間のネットワークが広がるなどの効果があった。

2-2. 「台湾における教養教育としてのオリンピック教育」(Leo HSU 大葉大学・准教授)

二人目として、台湾における教養教育と

してのオリンピック教育について、大葉大学のHSU氏がお話をされた。とくに、大学における教養科目として、スポーツやオリンピック教育がどのように展開されているかに焦点が当てられた。

スポーツは大学において、一般教育科目としてあり、誰もが行う科目として設置されている。オリンピック教育については、現段階において、大葉大学において、実験的に実施されている。具体的には、オリンピックの教育や歴史について、①平和教育、②多文化主義、③国際教育、④道徳教育、⑤美的教育という五つのテーマが中心に据えられている。

学生が持つべき能力として、①コミュニケーション能力、批判的思考能力、道徳的な推論、世界市民生活の準備、多様性との共存、グローバル社会への対応などが指摘されており、これらは、オリンピック教育と重なる部分がある。すなわち、オリンピックに関する知識を教授するだけではなく、世界市民となるためのよりよい態度、人生哲学としての前向きな態度を教育することが、オリンピック教育の重要な一部であり、実際に大葉大学において実施している。美的教育においては、スポーツと芸術との間にある概念区別、芸術と美学についての概念的相違について討論している。

学期を終えて、オリンピック教育の反省点として、より批評的な考え方(critical thinking)が必要であること、オリンピックには様々な問題が内在しており、その問題点について(結論を出すよりも)考え抜くことが重要である。また、より国際的な視野が必要で、他の地域や世界でなにが行われているのか知ることが重要であり、授

業においても改善の余地がある。

また、金メダリストにオリンピズムに対する理解がない点は懸念事項で、最終的には、教育機関においてだけでなく、まさに「アスリート」に対してオリンピズムを理解するための教育が必要で、この点が今後の課題である。世界的にみてもオリンピック教育は不十分であり、オリンピック教育の発展のためには、今よりさらに踏み込んだプログラム、批評的な思考、魂と肉体との融合の哲学が求められる。また、継続して行っていくことの大切さも強調された。

2-3. 「韓国におけるオリンピック教育の過去・現在・未来」(Gwang OK 博士、忠北大学校・准教授)

韓国におけるオリンピック教育は、1988年のソウル大会が一つの契機となった。韓国オリンピックアカデミー(KOA)は、研究活動のほかに、オリンピック教育やオリンピズムにも力を入れている。近年では、オリンピック教育は、KOAの中のオリンピック評議会によって行われ、文化・環境・教育委員会が発足し、オリンピック教育の拡充、推進を図っている。

学校教育におけるオリンピック教育では、小学校より、オリンピック教育の概念やオリンピック観賞について、保健体育科だけではなく、社会科や世界史などの授業でも実施されている。中等・高等学校では、主要なテーマをもとに議論し発表するような授業も展開されているが、大学入試科目ではないため、重きが置かれていない。

また、オリンピックは現在、帝国主義、商業主義、ユーロセントリズムなど、様々な問題を抱えている。そのような諸問題か

ら目をそらすのではなく、負の側面についても考えていかなければならない。

今後の韓国におけるオリンピック教育を展開していくにあたり、以下のような課題がある。それは、多様なカリキュラムが必要であること、アカデミックプログラムを拡張すること、スポーツやオリンピックの価値の内面化をはかること、などである。ピョンチャンオリンピック大会を迎えるにあたり、オリンピック教育に対する、さらなる深い洞察、オリンピックの哲学が求められる。

2-4. 「筑波大学附属高等学校におけるオリンピック教育」(中塚義実氏、筑波大学附属高校教諭)

まず、附属高校でオリンピック教育を行うにあたり、「オリンピック教育とはなにか」を、他の教員に理解してもらうことが大変であった。そのため、まず、オリンピック教育に対する共通理解が重要である。

オリンピック教育の具体的内容として、附属学校における総合的な学習「オリンピックと教育スポーツ」の展開があげられる。受講生は5名で、大学教員の講義や博物館の見学などを通して理解を深めていった。また、自由課題のもとにレポートを作成し、生徒自ら深い考察をすることが出来た。

また、北京で行われた国際ピエール・ド・クーベルタンスクールに2名が参加し、太極拳の練習やオリンピズムの講義、中国のオリンピック史、グループディスカッションなどを体験し、有意義な交流がはかられた。

現状でも実際に、附属学校においてオリンピック教育はさまざまな場面で、さまざま

まな形で行われており、あえて「オリンピック教育」と唱えるその意味について考えていかなければならない。それを踏まえれば、さらに展開できることがあると考えられる。たとえば、現状での歴史や理念教育は不十分で改善の余地があり、また、嘉納治五郎の遺産について学習することは意味があると思われる。今後のオリンピック教育のあり方として、ローカルな、各国、地域に即したオリンピック教育のあり方を模索することも重要である。

【基調講演、シンポジウムを通して】

今回の、オリンピック教育をテーマにした国際シンポジウムは、とくにアジアのオリンピック教育の情報の共有と、ネットワークの構築を目的に実施された。ヨーロッパ主導のオリンピック教育ではなく、アジアに目を向け、各国、各地域に根差した、求められるオリンピック教育のあり方について意見交換できた点など振り返ると、非常に有意義な会であったと言えよう。

オリンピック教育は、オリンピックやスポーツの価値を伝えることも一つの重要な内容である。その際、根幹となる普遍的な価値（国際理解、平和教育など）を核として共有しつつも、その表現の仕方や+アルファの部分において、各社会、地域に合わせたものが必要とされる点を再確認できた。

とくに、日本においては、嘉納治五郎の思想や遺産に目を向けることにより、オリジナリティ溢れるオリンピック教育の確立が適うであろう。各国、各地域の独自性を尊重しつつ、融合し、再生産することにより、アジアにおいて共有し得る、一つのオリンピック教育の構築も可能と思われる。

その成果を、若手育成のための教育のツールや、人格形成の礎、文化遺産として世界に発信していくことなど、大局的に捉えることも大切であろう。

そのためには、ネットワークを確固たるものにし、今回のような会議を継続して行うことが肝要である。また、いかに社会的認知を得るか、あるいは現場の教育者の理解を得るか、知恵を絞らなければならないことも多々あり、課題点も多く見出された。課題点を踏まえ、一つ一つ歩を進めることを CORE の役割として、改めて刻まなければならない。総合して、いろいろと考えさせられた国際会議であった。

文責：竹村瑞穂（筑波大学 CORE 研究員）



熱心に聞く参加者



シンポジウム登壇者（前列）と関係者